

「三十七の菩薩行」御法話 Byドルズイン・リンポチェ@2017リトリート

(2017. 3. 15-16+22 @大津)

■【第二十五偈】

菩提を望んで身さえも捨てるなら 外なる諸物は論ずるまでもなし

それゆえいかなる果報も望まずに 布施を与える仏子菩薩行

■『菩提を望んで身さえも捨てるなら』というのは、

『仏の境地を得たいと欲するならば、自分自身の身さえも与えるでしょう』、ということです。

ですから、「私の財産」などは言うまでもありません。仏地というものが欲しいならば、身体さえも捨てる、と。

『外なる諸物は論ずるまでもなし』というのは、『ならば、財産は言うまでもなく捨て与えるでしょう』ということです。

そして、『それゆえいかなる果報も望まずに 布施を与える仏子菩薩行』、と。

布施をするときに、何か見返りというものを望んでするのではないのです。

果として何かを得ることを望んで行ってはいけません。

たとえば、「今日私がお茶をあげたから、明日お茶を与え返してくれるだろう」…というように、何かを期待してやるではありません。

そういう期待や疑いから行うのではない布施を行う。

ここに説かれているのは菩薩が行う行ですので、実際に我々が実践するのはなかなか難しいのですけれど、まずはこういうことを知って、そこから自分でやれる限り、出来るところから始めていくことが必要です。

■布施を行うことは非常に大切です。

ふだんわれわれは「ケチ」があるために「苦しみ」があるのですが、「苦しみ」と「ケチ」とは同居しています。

たとえば、「財産がたくさん欲しい、あれが欲しい、これが欲しい…これもあれも欲しい…」というのと「ケチ」というのはいっしょにあります。

たとえば、「車も欲しい、家も欲しい、あれも欲しい…」 「ひとつ…ふたつ…みっつ欲しい…」と、大きな苦しみがあるのですが、そこには「ケチ」というものも一緒に備わっています。

それはなぜかという、財産を他に与えるのではなくて、自分のところに入ることばかり考えているからです。ですので、「ケチにならずに、他に与えること」が大切なのです。

「いま人に生まれて、来生に人に生まれるのは難しいんじゃないか？」「財産は欲しいばかりだ」…と考えると執着すると、結局そこから煩惱が生じ、心に苦しみが生じ、心が楽しめないのです。結局財産があっても楽しくない。ですので、心がケチにならないようにする必要があります。

今生のためにも、来生のためにも、ケチを無くすことが大切です。

前回(注:前行講座にて)「因果の法」について勉強し、「ケチと執着の異熟果として、餓鬼に生まれる」というお話をしました。そういう理由を知って布施を行うのです。

布施をするのも、それは「菩提を得るために行う」のです。

そのために資糧を積む必要があるのですが、「福德資糧」と「智慧資糧」を完全にすると、

そのために三宝などに布施を行うのですが、布施というのは必ずしも財産などの物質的なものだけではなくて、自分の身体・言葉・心のすべてを使って行います。

たとえば、住むところが必要な人には住むところを与え、食べ物が必要な人には食べ物を、飲み物が必要な人には飲み物を与えるのです。

何か手伝いが欲しいという人には、自分のできうる限りでそれを手伝っていくことが布施になります。

「菩提を得たいのならば、たとえ車であろうと家であろうと、布施をすることが大切だ」…と、大切な理由をまず知る必要があります。

「布施することができない…」というのは、自分の側だけ考えて「自分のなかにだけ入ってくればいい…」と考えて、そこからケチが生じてくるからです。

しかしケチになりますと、心に幸せがないですし、今生での幸せも得られないばかりか、来生での幸せも言うまでもなく得られません。

■菩薩という人たちは、『菩提を望んで身さえも捨てるなら』というように、菩提を得るためには、自分自身の身体を与えることさえも厭わないのです。

「五道十地という道を歩む、上の状態におられる人たちは、自分の身体を捨てることさえも厭わない」ということは、お経のなかにたくさん説かれています。

『仏の境地を得るために役立つならば、自分の身体も喜んで捨てる。自分が仏の境地を得るための良い機会を得られたのだ！』…と思って、喜びのうちに自分の身体を投げ捨てます。

自分の身体を布施することによって、長い間自分が積んできた悪い業が浄まるのです。

これまでずっとケチや執着・怒りなどによって長い間悪い業を積んできたのですが、自分の身体を捨てることによって仏の境地を得られる機会を得られたのなら、それを非常に喜んで捨てるのです。

そういう身体を施すなどということは、私たち自身はなかなか出来ないのですが、せめて心の中のケチな
思いを少しずつ減らして行って布施を行ったり、何か手伝いが必要な人には手伝いをする。

しかも、喜びのうちにそういう行いをしていくのです。

それによって、私たちの側も資糧を積んでいくことができるのです。

■ 布施を行う際には、返ってくる結果というものを考えてはいけません。

たとえば、『いま私が彼を手伝ったのだから、将来何かあったときには手伝ってくれるだろう』・・・と考えるの
は間違いです。

知ってる人が苦しんでいるから、「手伝ってあげるから、頼んだら自分のことも手伝ってね」・・・ということが
ときどきあるかと思いますが、それはダメなのです。

手伝うのなら手伝う。そこに期待とか疑いもなく、ただ手伝うことが大切です。

ひとつのたとえ話として、私がインドのお寺にいたときのお話です。

お寺でお坊さんたちが一緒になってお茶を飲みに行きます。

インドのお寺の学校でしたら、5～6 時の間が休憩時間なのですね。

休み時間ですので、ちょっとリラックスしてもいいですし、友人たちと話したりゆっくりしたり遊んだり、喫茶店に
お茶を飲みに行ったり、散歩してもいい・・・という時間帯が5時から6時です。

その時間帯に、近くのところにインドのお茶を飲みに4～5人でよくいっしょに行っていました。

そのときにひとりが「今日私が布施する」と言ったら、「じゃあ次、明日は私」、「今日私がお金を払うから、
明日はあなた」・・・というふうに順番に。

そこには「明日払ってくれるだろう」という期待があるわけです。

それで、私も払わなければいけないわけですね、順番でやっているから。

・・・ですが、こういうのではダメなんですね(笑)。

お茶を施すのなら、与える。「明日お茶を返してもらおうがなかろうが、お茶を与える」のです。

一般的に考えて、お茶を施すのはよいことなのですが、一番よいのは、「期待なく望みをもたずに与える」こ
とです。

「いま自分は10ルピーしか持っていない。今日お茶を布施してしまったら、自分は明日お茶を飲めな
い・・・」と。

でも、飲めなくてもいいのですね。

「飲みたいという希望もなく、飲めなくてもいいけれど、いまお茶を施す」、と。

そういうことをする必要があります。

■ そのようにお茶を布施したりするのですが、もし昨日他の人がお茶を布施してくれたのに、自分がお金を払わなかったりすると、少しずつ友人たちが離れていってしまいます。(笑)

それはなぜかという、期待があるからなのです。

「自分がやったら、向こうがきっと返してくれる」という期待があるからです。

でも、それは間違っている例です。

本当は彼は何か問題があってお金がなくて払えないのかもしれないですが、そのときにはそうは考えられないのです。

「与えたのだから、与えてくれる」と考えているから、「与えてくれないのなら、離れようか」…と考えて、友人がちょっとずついなくなってしまう。

結局、「お茶を布施することで、返してもらえる」という期待があるからです。

今生でこういうことが起こりうるのですが、来生に関しても同じことが言えます。

ひとりやふたりなら少しのお金ですが、全員になるとお茶でもすごいお金がかかるのですね…(笑)

■ ”異熟”を学んだときに、「布施をすると、来生にお金持ちになる」…等と説かれていたのですが、「今日自分が布施するから、来生金持ちになるだろう！」…と思って布施をするのではダメなのです。

いま自分が何か財産をもっていたりお金持ちであるというのは、前生に布施を行った結果なのですが、いま私たちが布施を行う目的は、「仏の境地を得るため」なのです。

大乘の教えというのは、今生の楽とか来生の楽のためではなくて、「一切衆生が苦しみから脱してほしい…」というその想いで行うのです。

ですから、「自分が財産を得るため…」という動機で行うのは、そもそも間違っているのですね。

「来生の自分がどうであるか…」ではなくて、「一切衆生が苦しみから逃れるように…」という想いで行うことが大切です。

■ もしあなたが布施を行うときに、「起こるべき結果を考えないならば、結果が生まれないのでは？…」と思うかもしれませんが、そうではないのです。

得るべき異熟を期待しなくても、来生には人に生まれたり財産をもって生まれたりすることもできますし、また、究極的には仏の境地を得ることができます。

それは、希望や期待がなくても得ることができるのです。

そのときに、想う対象を広く想うことによって、得られる結果も大きくなっていきます。

■『いま今生で私がかんばるのは仏の境地を得るためですが、今生のためや来生のためを考えずに、それをどうやってやれるのか…？

自分の母親や父親が苦勞して貯めた財産を、どうやって無駄にして無くせるのか？人に与えることができるのか？ 苦勞して貯めてきたお金なのに、それをどうしてそんな簡単に人に与えてしまうのか…？』

-----これを考えるためには、「因果の法」というものを考える必要があります。

それを考えないと、結局”欲の塊”になってしまいます。

仏は智慧をもった方ですが、「衆生のために行ったことと、自分のために行ったこと。そこからどういう結果が生じるのか？」ということを知っておられます。

「衆生のために行くことによって、大きな結果が得られる。自分のためだけ…というのでは、大した結果は得られない」ということを、仏は知っておられるのです。

ですので、われわれも何かを施すときは、小さなものからでかまいませんので、「何かいい結果が来るんじゃないか…？」と考えたりせずに、小さなものから実践していくことが大切です。

以上